

それぞれのメダルに向けて

北国にしては暑く長い夏が続いている。抜けるような青空に真っ白な入道雲が湧き、まるで絵に描いたような夏空だ。夕方になっても日中の熱を蓄積しているかのように、空は、全体が炙られたような薄い茜色になり、街が陽炎のように見える。

ロンドンオリンピックでの日本選手の活躍に湧き、インターハイや各種大会に思い切り汗を流した夏休みが終わった。インターハイでは、陸上男子100mとボート女子クオドルプルで3位というすばらしい成績を収めた。また、吹奏楽部は県大会で金賞を受賞して東北大会への出場権を獲得した。大編成の部では本高开校以来初の快挙となった。

インターハイに出場した男女柔道部、ヨット部、全国高校総合文化祭に参加した文芸部、放送部など、全国の高校生との交流を深め、全国のレベルを感じてきたことだろう。

学校に残った生徒たちも勉強合宿や補習に、汗を拭きながら一生懸命に取り組んだ。それぞれが成長の節を刻む鍛えの夏だったと思う。

オリンピックは、いくつもの忘れがたいドラマを残して閉幕した。メダリストたちの言葉はそれぞれに重く、胸にずしりとこたえる。

メダルに到達するまでにどれほどの敗北と失意、挫折を乗り越えたことか。孤独と不安の中で精神と肉体を極限まで鍛錬することの苦しさは、運動部の生徒ならば、その幾分かは実感として理解できよう。

彼らがメダルを獲得したときにははじけるような笑顔は私たちを幸福な気分にしてくれるが、むしろ、失意の底から光を探し出そうとする顔、倒れたときになお立ち上がろうとする顔を見ていたいと思う。彼らのその表情は、困難に立ち向かうあらゆる人々に強いメッセージを送り、限りない勇気を与えてくれるはずだ。

オリンピックを見ながら、高校生の頃に読んだ、高橋和巳という作家の一節を思い出した。「おのれがよって立つ最後の砦は何であるのか」という言葉である。困難に出会ったときに、あるいは打ちのめされたときに、立ち上がろうとするその根拠地は何なのだろう、そんなことも考えさせられた言葉だ。

人生は順風満帆ではなく、いくつもの困難や挫折をも含んでいることは、これまでの生活の中でみんなも了解していることだろう。様々な困難に突き当たり、その大きさに圧倒されているときに、それぞれがそれでもなお立ち上がろうとする、あるいは、立ち上がらせてくれる、内的な根拠地をもってもらいたいと思う。

本高生はそれぞれのメダルに向けて、何度でも立ち上がってほしいと心から願っている。

